

淡交会報

第91号
2023

淡交会結成120周年記念事業スタート

東京地方裁判所の裁判官（判事補）

北岡 憧子さん（111回）インタビュー



小 君
人 子
之 之
交 交
文 淡
甘 若
若 若
莊 醴
子 水

寄稿

長谷川澄雄氏ご逝去を悼む

清水 伸行 69回

19年間「淡交フィル」を後援する会」会長でいらした長谷川澄雄氏（47回）が9月18日にご逝去されました。

「淡交フィルを後援する会」

（以下、後援する会という）

は淡交フィルハーモニー管弦楽団の運営状況の厳しさを知り同窓生として応援していたこと、伊坂達孝氏（34回）を中心とする方々で1986年に設立されました。坪井東氏（30回、当時三井不動産会長）が初代会長でしたが、坪井氏が急逝され、伊坂氏が世話人代表として後援する会を運営されてきました。伊坂氏も2003年に亡くなられ、ヤマト株式会社社長の長谷川氏のもとに淡交会の染谷昭男事務局長（当時、43回）と二人で直談判に伺い、会長をお引き受けいただきました。

後援する会会員の会費と寄付金に加え、長谷川氏からの多額な支援金によって淡交フィルは長年支えられてきました。年1回後援する会世話人会を長谷川氏が主催され、ホテルのレストランで豪華な食事をいただきましたが懇談しました。

長谷川氏はお酒を飲めませんでした。私たちがのお酒で盛り上がった会話を静かに穏やかな笑顔でいらしたことが思い出されます。長谷川氏に連絡した時の電話口での氏のお元気な明るいお声が今でも耳に残っています。時には経営者としての観点から淡交フィルの運営についてのご指摘もいただきました。

長谷川氏は若い時から和泉元彌氏の父（和泉流19世宗家・元秀氏）から狂言を習い、その付き合いで元彌氏の後援会会長を引き受けられていたとのこと。狂言の発表会での出来事を面白くお話しされていきました。話を伺っていて、パトロンとして芸術家を支え自身も芸の造詣が深く玄人はだしの技量を持っていらっしやると感じました。

長谷川氏は90歳で役職の区切りをつけると言われ、一昨年、後援する会の会長をお辞めになりました。昨夏軽井沢の別荘に伺い、30分程お話しできたことがお会いする最期となりました。

改めて長谷川会長の大きさ優しさを実感いたします。長谷川会長、長年大変お世話

になりました。心から感謝申し上げます。ご冥福をお祈りいたします。

浅井邦彦君の逝去を悼む

山本 安正 56回

56期生会（三高たつみ会）元会長の浅井邦彦君が令和5年7月15日逝去されました。

淡交会の皆様には、淡交会報に長く浅井病院の広告が掲載されていましてご存知の方も多いと思いますが、千葉県東金市に所在する500病床を超える大病院の院長兼理事長を務めておられました。

東京医科歯科大学で医学を修めましたが、インターン制度廃止運動に関わったり、安保闘争にかなりのめり込み、血気盛んな面もありました。山岳部に所属し、登山やスキーに熱中、俱子夫人と結婚されたのも学生時代でした。

平成14年に脳梗塞を患ってから動作、会話も思うようになり、歯痒いことも多くあったと思いますが、そういう中にもって精神医療に関わる国内外の多くの役割をこなし、海外の医療者とも広く交流し、精神医療の発展に多大の功績を残されました。

浅井君らしい活動もあります。地域の皆様との交流です。病院の敷地内の大木「はんでん木」の名をとって「はんでん

ん木まつり」と称するおまつりを20年以上も続けて開催しております。

毎回4000人〜5000人の地域の人々が集まり楽しんでおります。また、弓道場を開設、市民に開放されています。障害者が地域で暮らすとなると、いろいろ摩擦があるようですが、浅井病院は反対もなくスムーズに地域に受け入れられているとのこと。

「精神障害と精神科病院への偏見と戦い、海外との交流を通じて日本の精神医療を向上させることに情熱を注いだ生涯でした」と俱子夫人は記しております。

中学、高校と共に学び、俱子夫人と中学の同窓という関係もあり親しくおつき合いをさせてもらっていた私としては、彼を失ったことは残念でなりません。

凜とした紳士がまたひとり此の世から去って行きました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

都市鳥、薄葉先生と生物部

元生物科教諭・唐沢 孝一

生物教師として私が両国高校に赴任したのは1970年、25歳でした。定時制に2年、全日制で15年お世話になりました。授業を担当したのは70回〜86回です。卒業した皆さ

ん、同僚だった先生方、その後如何にお過ごしでしょうか。私は5月に傘寿を迎えましたが、階段を踏み外して痛い目にあい、江戸川河口の干潟ではトビハゼを撮影中に転倒し、泥にはまりました。至って元氣。自然相手に楽しむ毎日です。

両国高校で忘れられないことが二つあります。その一つ。旧校舍時代の口の字型の中庭です。78年、十三代荒川潤校長の朝礼訓話中のことでした。「まさか？」と思わず我が目を疑いました。キジバトが中庭のサンゴジュの繁みに飛び込んだのです。野の鳥が墨田区内で繁殖を始めた最初の観察でした。

当時の東京は大気汚染や水質汚濁など都市公害の真只中。多くの人が都心から郊外へ脱出しようとしていました。なぜ野の鳥が都心に、しかもネオン輝く錦糸町に進出してきたのか。この素朴な疑問をひもとくべく、研究仲間と都市鳥研究会を立ち上げ、両国生物教室を拠点に研究が始まりました。有難いことに、当時の両高は、授業は厳しくとも、教師も生徒も自由に研究や部活に取り組める環境にありました。

都市鳥研究は順調に進み、トヨタ財団による研究コンク

ルでグランプリを獲得。総額1550万円の研究助成を受けました。拙著『マンウオッチングする都会の鳥たち』、『カラスはどれほど賢いか』などを上梓。91年には朝日新聞社に入社間もない市川裕一君82回が『ネオン街で眠る鳥たち』を全力で編集してくれました。

として2023年6月『都会の鳥の生態学』（中公新書）の出版にこぎ着けました。さて、もう一つ。両高で忘れられないのが「生物部、そして薄葉重先生」です。先生は、大学の動物学教室の大先輩であり、両高では生物科の同僚。公私にわたりご指導いただきました。

東京を舞台に繰り広げられる人類随鳥類としてのカラスやツバメ、スズメなどの生態は、戦後の食料難から飽食の時代、バブル経済とその崩壊、都市再開発や超高層ビルの出現、ヒートアイランド、ゴミ問題、コロナ禍など、時代を画する環境変化の中で栄枯盛衰を繰り返してきました。旧校舍中庭でキジバトを観察してから約半世紀。ライフワークである都市鳥研究の集大成

先生の専門は昆虫学。日本における虫こぶ研究の草分け的存在です。著書『虫こぶハンドブック』はフィールドワーカーには欠かせないバイブル的存在です。一方で先生は、日本生物教育学会副会長として全国の生物教師を牽引する立場にありました。

「高校の生物教育には高校レベルの真理がある」これが先生の持論でした。大学での最先端の研究成果を切り売りすることなく、内容を吟味し、具体的に分かりやすくその本質を若き生徒に伝えようと努められました。私もその姿勢を学ばせていただいた一人です。

先生は啓林館出版の文部省検定教科書「高校生物」の著者でした。及ばずながら私も、当時三省堂出版の敏腕編集長として名を馳せた小野秀昭氏57回にスカウトされ、三省堂出版「高校生物」の著者の一人でした。76回以降の両高生

は、薄葉先生または私が著者であった教科書で生物を学んだかと思えます。

薄葉先生と私は生物部顧問として共通の楽しみがありました。卒業生の活動や動静を語り合う、至福の時を共有したのでした。

卒業生の活躍ぶりは際限がありません。生物部に限っても、田仲義弘君68回の『狩蜂生態図鑑』は研究レベルの高さはもとより、動物カメラマンとしても群を抜いています。染谷孝君69回（佐賀大学名誉教授）の『人に話したくなる土壌微生物の世界』は分かりやすく含蓄に富んでいます。

分かりやすさの源泉には薄葉先生の薫陶があったかも知れません。魚類研究に打ち込む半沢直人君72回（山形大学名誉教授）、難病研究に取り組む澁谷浩司君76回（東京医科歯科大学教授・副学長）、ハワイで世界の蝶類を研究する千葉秀幸君76回（ハワイビショップ博物館客員研究員）、沖繩のヤンバルクイナ保護の最前線で活躍する小野宏治君84回（環境省沖繩奄美自然環境事務所生物多様性保全企画官）など、まさに多士済々かつ氷山の一角です。

私が学長を勤めるNPO法人自然観察大学も、講師陣に

昆虫の田仲義弘君、植物の金林和裕君71回、菌類の根田仁君73回など生物部OB諸氏に支えられています。薄葉先生や染谷孝君に特別講義をお願いするなど、半世紀前の両高生物部の活動をそのまま引き継いでいるかのようです。

生物部以外にも薄葉先生と私が共通して授業をもった卒業生も数えきれません。

23年2月、倉敷市にある川崎医科大学教授兼学長補佐に就任した西松伸一郎君79回より「今日私が遺伝子研究を行っているのも高校時代に薄葉先生と唐沢先生の授業に出会ったことがきっかけでした」との便り。教師冥利に尽きます。早速に薄葉先生にお伝えせばと受話器をとりました。が、先生は2015年、83歳で永眠されました。

あの世とやらで先生と再会する時には、卒業生の土産話を山ほど持参するつもりです。卒業生諸君の益々の活躍と両国高校のさらなる発展を心よりお祈りする次第です。

芥川の『歯車』とココア

寺澤 捷年 60回

「これが恐らく災いしたな」とわたくしは思った。

『歯車』は芥川龍之介の最晩年の作品であり、片頭痛に先行する閃輝暗点を「歯車」

として描き出している。わたくしはこの作品を再読し、芥川は片頭痛患者が避けなければならぬ「ココア」を愛飲していたことに気づき、「これが恐らく災いした」と考えたのである。

参考までに芥川がこの作品に記した閃輝暗点を前兆とする片頭痛の描写を引用する。

「僕は省線電車の或停車場からやはり鞆をぶら下げたまま、或ホテルへ歩いて行った。往來の両側に立っているのは大きいビルディングだった。僕はそこを歩いているうちにふと松林を思い出した。のみならず僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？——というのは絶えずまわっている不透明な歯車だった。僕はこういう経験を前に何度か持ち合わせていた。歯車は次第に数を殖やし、半ば僕の視野を塞いでしまう。暫らくの後は消え失せる代わりに今度は頭痛を感じはじめ、——それはいつも同じことだった。」

この『歯車』という作品におけるココア愛飲の様子は、「一、レエンコオト」と「二、復讐」に記されている。しかし、この描写だけではココアの愛飲者であったとは断定できないので、全作品を調査し、



薄葉先生（右）と筆者（2009年10月撮影）